

11月1日 和歌山県伊都郡花園村梁世遍照寺 仏の舞
滝、遍照寺、仏の舞。

主役

文殊菩薩 素面、僧眼、頭巾
 仏、 5人 仏の仮面、光背を負う、僧服
 乙姫 1人 美女の仮面 浄衣、宝玉を持つ
 侍女 1人 同上
 天蓋美 1人 同上
 父鬼 1人 赤鬼面、長刀、さいの鉾を持つ。山男風の服装
 太郎 1人 青鬼面 サスマタを持つ 山男風の服装
 次郎 1人 白鬼面 打手の小槌 山男風の服装
 三郎 1人 白鬼面 山刀 山男風の服装
 四郎 1人 青鬼面、さいのいき杖 山男風の服装
 五郎 1人 鬼面 棒
 座方 10人 笛、鉦、太鼓 山男風の服装

舞 鬼が乙姫を中に竜宮で宝物を持って悪い生活をしている所へ釈尊の使として文殊が現われ、仏の世界に極楽浄土のあることを悟らせ、仏の舞を見せて、乙姫を仏の弟子にする鬼共も悟って太平楽の舞となるすぐ遍照寺へ行く。早速先づ面を見せて貰ふ。

仏の面、5面あり。皆新しい江戸末期か。

第1	大日如来、正面珠の頂くもの	長さ 25cm	幅 17.5cm	厚 10cm
第2	釈迦（頂に黒（剥げている））	23.5	17	9
第3	阿弥陀 螺髪のもの。	23.5	17.5	7.5
第4	阿*（*は門に衆、あしゆく）釈迦の通り。			
第5	薬師、頂に薬。	24	17	9

鬼面。これも江戸末期か

父鬼	赤	長 40cm	幅 34cm	厚さ 15cm	角 19cm
太郎	黒（膚色）	23	21	12	12
次郎	朱赤	23.5	20.5	9.5	11
三郎	イエローオーカー	21.5	18	9.5	11
四郎	Dark Green	23	17	11	16.5
五郎	Indian Red 1本角	22	20	10.5	15
乙姫	髪は緑	25	17		
侍女	宝珠持	25	17		髪は黒
侍女	天蓋持				髪は黒

楽器 締太鼓、大小2、摺鉦、鉦鼓、笛、数個。

旧暦の10月が閏となる年のみやる。仏の舞に出る役につくものは梁瀬在住の30才以下のものに限る。もとは長男のみ。若連中といった。釈迦の使に出るものが最も主な役で年長者がやる。大太鼓の方は“おん田”にもやる。小太鼓は仏の舞の太平楽に出す。

(中略)

旧10月が神無月で、宮行事がなく、10月の閏の年は神無月が2ヶ月続くので、神様が2ヶ月無いと悪魔がはびこる。このためこれを仏が追うということから、仏の舞をやるといふ。旧閏10月の月の閏10月1日にやるが、これを61年に1度と伝えた。

遍照寺は真言宗。梁瀬は1村全部真言宗である。一時禅宗であった記録がある。

『伊都郡志』（名著出版 S46）亥の子の歌

亥の子の餅は搗いてもはたいてもまだを江ぬ此処のかどではどっさりと

亥の子餅をつっかんこついてもついてもまだを充ぬもう一つおまけにつっかんこ

(中略)

仏の舞は午後1時より遍照寺の本堂前の庭で行われる。

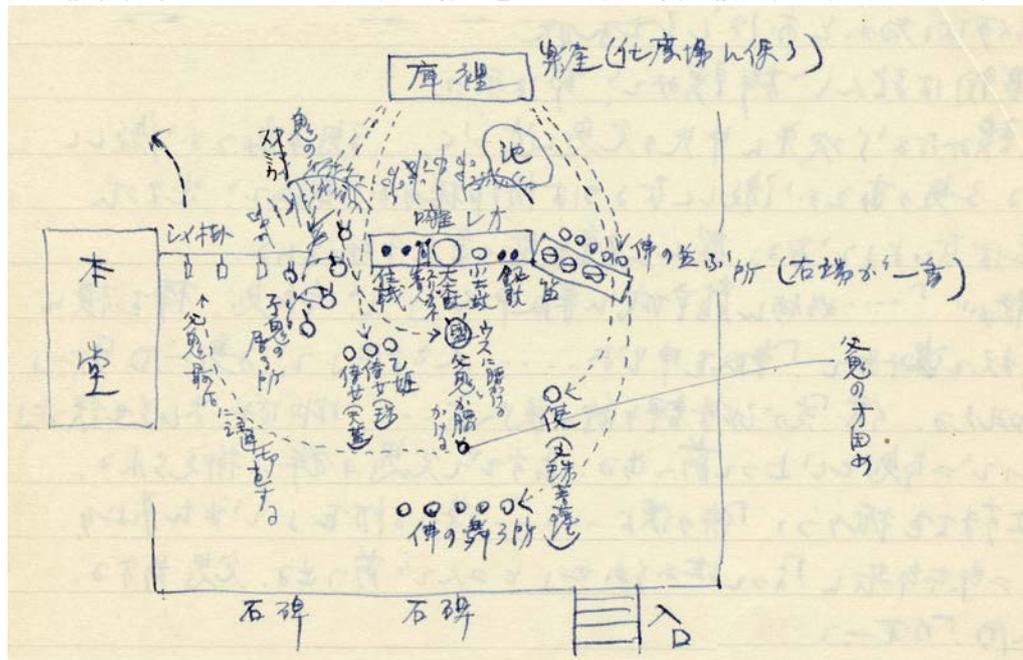
遍照寺の面は江戸中末期の新しいもので、古いものはない。

仏の舞午後1時より、本年やることになったのは61年目のためではない。61年目という伝説を他の人に聞いたが還暦に関係があるという。還暦は人間1代、即ち一生を意味する。仏の舞は一生に1度やるという意味だといふ（教育長の談）。



本年はライオンズクラブから歌和山市で出演して呉れとの話があって、そのため練習を始めているので、これを機会に日曜日の11月1日にやることになった、ほんとうは遍照寺の本堂の中でやるのであるが、本堂が朽ちかけて危険なので、本堂前の広場でやることになった。

鬼の棲居。本堂でやる時は笹で場所をつくる。今度は櫛の杜と笹で作ってある。棕櫚も伐って来て並べる。



舞庭への行道はない。囃し方も、仏、乙姫、鬼、共々舞庭の所定の位置につき、教育長の挨拶があり、摺鉦の合図で舞に移る。

仏5人。順番を書いた木札（卒塔婆型）を両手で胸の所に奉拝して、囃し方右手の後に並ぶ。

父鬼は中央。大太鼓の前に盥を逆に据えて、その上に腰をおろす。子鬼は囃し方の左側鬼のすまいの間に順序不同に居る。順序なく動き廻っている。乙姫、侍女、天蓋持は右からその順に1列に並んで、住職の坐っている薄べりの左側に居る。使（文殊菩薩）が唱え言葉を書いた巻物を奉拝して笛の前方に立ち、中央の方を向いて、唱えごとが始まる。

座（囃し方の坐っている席）からまづ銅鉢1つ鳴らして「南無釈迦牟尼仏」と3度唱える。次に使が「南無釈迦牟尼仏」と唱え「かやうにまかり立つたる者をば如何なる者かとおぼし召され候へ……」と唱えるのである。唱詞は殆んど棒読みで、節はない。

読みながら次第に中央の父鬼に近づく。子鬼の動きが激しくなる。子鬼の動きが激しくなるのは所作振りが自由で定まった振はないようである。盛んに櫛や笹の葉を干切っている。

使が「…如何に龍宮城に案内申ぞ」で、太郎鬼。棒を横にかまえて進み出て「案内を申ぞよ……人さやほ」で、子鬼一同「ワオー」と吼える。使「先づ汝等静り給へ候らへよ…はやはや、まいらせ候へよ」こゝで二郎鬼とで上って前へ出る。出すぎて父鬼の鉢で抑えられる。さすまたを振りつゝ「仏の使よ……落つる所を」でまた尻上り、二郎太郎共に「あって泣からかせ」と2人で前へ出る、父鬼制する。一同「ウオー」

この争いが続いて、五郎が仏の浄土のいみじきを尋ね使がこれを今現前に現わさんと、教化の舞となる

銅鉢1つ鳴らし、笛2人、囃子につれて5菩薩登場。木札を奉拝した姿で、左足を外から大きく廻して爪先と踵をそらせ乍ら前へ出し、右足を引寄せて両足を揃えて立つ。この間に身は座の方即ち右を向き、揃えたときは左、正面向きと180度廻轉する。大日如来、釈迦如来、阿弥陀如来、阿*〈*は門に众、あしゆく〉如来、薬師如来の順である

舞の次第、素路の記録による。

銅鉢一つならして始まる。

座が「南無釈迦牟尼仏」と唱え、次に文殊が同じく「南無釈迦牟尼仏」と唱える。これを三回繰り返す。

太郎名乗「…如何なる者ぞ、何者ぞ」で棒を横にかまえる。子鬼一同「ウオー」と吼える。

二郎「仏の使よ」で、前へ飛出る。出過ぎて父鬼に鉢で制される。振りには、一句毎に左右に足を踏み出し、さすまたを振る。「とつて宙に投げ上げて」で、飛上る。

二郎「…太郎よって泣からかせ」と

三郎「…太郎よって泣からかせ」で、

太郎が飛出すのを、父鬼鉢をもつて制す。子鬼一同ウオーと吼える。

文殊「…同じきは教化の舞」で、銅鉢一回鳴らし、笛二本囃子につれて、五菩薩登場。夫々の名前を書いた、卒塔婆型の長さ二十程の木札を両手で胸前に奉持し、舞乍ら出る。順序は大日如来、釈迦如来、阿弥陀如来、阿*へ*は門に衆、あしゆくゝ如来、薬師如来、の順である。

足運びは、左足を外から大きくまわして爪先と踵を躡らせ乍ら前へ出し、右足を引寄せて両足揃えて立つ。この間、身体は一八〇度回転して、左足から出た時は座の方を向き、次に右足から出る時は、正面をこちら向きとなる。一同、座を背にして一列横隊になると、次に両腕を上から横に開き、弧を描いて胸前にもつて来て、卒塔婆を両手ではさむ。三回繰返す。

次に卒塔婆を右手に持ち、左足を外からまわして、座の方を向く。即ち後むきとなる。卒塔婆を持たない手は下に垂れたまゝ、持った手は体がまわる時、下から弧を描いて上げ、体の向きが変わって止る時、両手を胸前で合す。

次に左手に卒塔婆を持ち替えて、右足を外からまわして、こちら向きに戻る。以上、三回繰返す。

次に左手に木札をもつて左まわりに向ふへむきを変え、右手にもち替えて、右まわりに向き直る。以上、三回繰返す。

次に登場と同じ足の運び方で、左端の大日如来を先頭に図の如くまわり、大日が右端へ入れ替り、最後の薬師が左端になって一列に並んだら、そのまゝ右端から、大日、釈迦、阿弥陀、阿*へ*は門に衆、あしゆくゝ薬師の順で順次、(同じ運足で)舞乍ら退場する。

此の間、鬼は、鬼のすみか、時々吼える。銅鉢、一つ鳴らす。

文殊「仏の浄土にはあような殊勝なる事どもが候……」と読み続ける。「…仏の浄土に参らせられ候よ」で、乙姫、宝珠持ちの侍女を左側、天蓋持ち侍女を右側に従えて、文殊の右隣にならぶ。文殊の*事、最後の詞章で、五郎が一同の鬼の道具をとりまとめ、文殊の足元へ投げ出す。鬼共は、渡すまいととして、夫々に抗う。

これより「太平楽」。

先づ、父鬼は腰の太刀を抜いて、子鬼は木の枝を手折り持って、五方を祓う。

太平楽の囃子。次第に拍子を早め、散々に暴れた後、終りにウオーと吼えて、父鬼が退場口の注連を刀で絶切って一同走り入る。

仏の舞の笛は、仏の出と、入る時と、二種類ある

